

試合に臨む監督としての私心

武村, 秀夫 / TAKEMURA, Hideo

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

11

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2016-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014100>

試合に臨む監督としての私心

武 村 秀 夫

私がラグビーと出会ったのは五歳の頃である。当時法政大学体育会ラグビー部の監督・部長を務めていた父の影響を受け、ラグビーボールを遊び道具として初めての接点を持った。プレーヤーとして始動したのは、中学三年生の夏からである。高校三年間・大学四年間（法政一高・法政大学）をそれぞれ過ごした。当時の監督の方々は全てにおいて厳しく指導されておられた。その厳しさゆえ、私の周りの仲間や当時の選手達は理不尽な思いを抱くことも多少はあったのではないかと思う。しかしその厳しい指導は、私の現在に至る人生の糧となっている。

指導者としては昭和六十年四月から母校のコーチに就任、平成三年から間隔はあるが実質九年間監督を務めた。私の監督就任時の重点事項は、選手とコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことであった。就任当初、負のスパイラルに巻き込まれていた法政ラグビー部を「法早時代」と言われていた昭和五十年～五十六年頃の時代のように強くするには、どうすればいいのか研究模索した。

毎年シーズン開始時には、様々な選手が入れ替わり在籍する中で、年間目標を立て方向性を定め、チームが一丸となるようにミーティングをするのである。それまでの監督達は、監督・コーチ陣だけのミーティングで物事を決定し、それを学生に示して指導していた。その手法に少なからず異論を持っていた私は、ミーティングのメンバーにキャプテン・副キャプテン・マネージャーなどの学生リーダーを参加させ、練習計画・試合出場のメンバーを共に協議し練習に試合に臨んだ。私はこれが選手の成長を促し、チームを目標に向け前進させる適切な方法であると考えたのだが、コーチ陣の中には前年度までの考え方を持つ者もいて、私の指導方法を不満に思う者も少なくなかったようである。しかし私がなぜこの指導方法に拘ったのかというと、ラグビーの試合は、キャプテンないし他の選手の判断がゲームの勝敗に大きく影響するからである。良い例として、2015年ラグ

ビーワールドカップの日本対南アフリカとの試合が挙げられる。三点差で負けていた日本が、ペナルティからの攻撃で三点を取って引き分けに持ち込むか、トライ(五点)をして逆転するかという選択を迫られる場面があった。監督は三点を取りにいこう指示した様であるが、キャプテンは選手の意見を取り入れ、試合の流れを読みトライを取りに行く選択をした。そして見事に五点を獲得し逆転勝利したのである。

最近では、監督が試合中インカムなどを使用してウォーターボーイやメディカル担当者に指示をして選手に伝える事もあるが、本来ラグビーの監督は、試合中フィールドには立たずスタンドから見守るべきであり、プレー中の事に関しては各選手の判断およびキャプテンの指示によるべきだと考えている。そしてそれは、監督と選手の常日頃からの練習と私生活において信頼関係を築くことによって成り立っているのであり、欠かすことのできないものである。

さて指導者の役目はチームの強化であるが、どのように選手を導いていくかが大切である。私は日常生活の過ごし方がそのままプレーに影響すると考えている。個々の選手の技術の向上は大前提だが、グラウンド内の技術的な指導だけではなく、私生活に対するアドバイスが選手の精神面での成長に繋がる。さらに私生活のルールを指導者と選手達が話し合い、それを守ることで選手に自覚と責任を持たせることが重要である。また指導者の行動・言動は常に選手から注視されているということも忘れてはならない。指導者の行動・言動は、選手の成長を促すことが出来るが、一貫性のない指導では選手が目標を失ってしまう結果になることもある。監督から選手に至るまで全員が団結して目標に向かうことに意義があり、そこに信頼関係を築くことができると考えている。またそのルールの範囲を狭めれば反発が高まり、広げすぎれば問題が起きやすくなる。いかにその輪を調節するかが必要であり、その輪は、毎年変化し続けるものである。

以上のように、監督と選手の間における信頼関係の重要性を述べてきた。私が監督として選手と向かい合うとき、

選手を信頼する

意見を聞き入れる

注意(叱る・怒る)することを怠らない

勝利は選手の努力の結果

選手のミスは指導者の指導力不足

この五点を指導方針とした。

これらは他の指導者の考えや他大学の監督などとの会話、自分自身の経験から生まれたものである。選手はその指導から学び、最終的には自分の考えとして行動に移すべきである。これは対人関係において、どんな場面でも言えることではないだろうか。学校における教師と生徒の関係、また会社における上司と部下の関係でも、最終的にどうするのかという判断は自分自身がすべきである。私が一貫して説いてきたラグビーの精神でもある自己責任が選手達のこれからの人格形成に好影響を及ぼすことができれば嬉しく思う。

最後に指導者は選手を尊重すること、これがなければ指導者とは言えない。選手を信じることから信頼関係は生まれてくる。2015年度大学選手権の決勝において、帝京大学の岩出監督・東海大学の木村監督は、共に試合中スタンドの最上段で選手を見守っていた。これこそ私の考えるラグビーの監督像である。